

一〇一二年 二月一日 午前
—国語—

第一回 一般選抜入試

(五十分／百点満点)

注 意

- ①指示があるまで開いてはいけません。
- ②解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- ③質問がある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなつた場合、気分が悪くなつた場合は、だまつて手をあげなさい。
- ④「。」「。」はそれぞれ一字と考へなさい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

【一】次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

院内学級(入院している子どもたちが学ぶ教室)で一緒に勉強している一健と良志と昴。知樹は少し遅れて入院し、特別にパソコンの使用が認められている。

次の日、一健は売店で新しいノートを一冊買ってきた。それだけで胸が高鳴った。ただでさえ、新しい文房具はやる気になるものだが、これから行うことが、一とさらに気分をかきたてる。

神妙な手つきで表紙を開いて、シャーペンで書きつける。

「トレジャーハンター計画」

トレジャーは財宝、ハンターは狩人という意味だ。この場合のトレジャーは言うまでもなく、良志の作った物語を意味する。このノートは、物語を無事に手中に收めるまでの計画をしたためる計画書だ。

タイトルを書くと、一健は病室のドアを閉めてから、良志のそばに立つて、ほかの二人に向かつて言つた。

「ちよつとみんなに話があるんだけど」

「何? 何?」

テレビを見ていた昴が声をあげた。知樹のカーテンは閉まつたままだつたが、一健はもつたいぶつて宣言をした。

「えー、じつは秘密の作戦を決行します」

「秘密? 作戦?」

「しーっ」

二つのワードだけで、すでに色めきたつた昴を抑えつつ、一健は小声で続けた。

「これから、トレジャーハンターチームを結成します」

「トレジャー、ハンター、チームって?」

昴は丁寧に繰り返して、首をかしげた。

「みんなで力を合わせて、お宝をゲットするチームだ」

「みんなでお宝? やつた!」

それをきくと、昴は万歳をしたままベッドにうつぶせに倒れた。

シャツ。

すると、閉まりっぱなしのカーテンが少し開いた。珍しく知樹が顔を出す。パソコンを手に入れた知樹は、すっかり大人しくなつたと同時に、他人には無関心にもなつっていた。

自分のベッドの周りをパソコン機器と分厚い説明書でバリケードのように囲い、パソコン島の住民みたいになつていい。囲いの中で、知樹は一言も発さず、夜中までいつもゴソゴソやつていた。

「おつ、知樹も一緒にやろうぜ」

顔を出した知樹に、「健はなるべく楽しげに話しかけてみた。スペイを生まないためにも、ここは何としても巻き込んでおかなければならぬ」

知樹から返事はなかつたが、興味がない訳ではなさそうだ。

シャーツ。

カーテンがさらにもう少し開かれた。

「知樹には計画書をパソコンで作つてもらいたいんだよ」

良志が具体的な役割を頼むと、

シャーツ。

すっかりカーテンが開いた。⁽³⁾これで第一閑門は突破だ。

一健と良志は顔を見合わせて、うなずいた。

「では、詳しいことを説明します」

良志のベッドの周りに二人を呼び寄せ、一健は弾みのついた声で前置きし、トレジャーハンターについての説明をした。

良志が作った物語を書いたノートがなくなつたこと。それはどうやら屋上にあるらしいこと。トレジャー、つまり財宝はそのノートのことで、それをハント、手に入れること。つまり自分たちがトレジャーハンターなのだとということを簡単に説明し、肝心な注意事項を重々しく告げた。

「これは秘密だ。絶対に大人にばれてはいけない」

「うんっ。秘密だね」

⁽⁴⁾昴は目を輝かせてつばを飲みこんだ。秘密、という言葉にすっかりやられた様子だ。その隣で、丸いすに座つた知樹がひざの上のパソコンのキーをならし始めた。

カタカタカタ……。

「おおっ」

のぞきこんでみて、一健は声をあげた。

パソコン画面には、

トレジャーハンター計画書

というタイトルが入つていた。

「なんか本格的だなあ」

感心していると、知樹はさらにキーをカタカタいわせた。すると画面に、勝手に文字が出てきた。

日時 ←

場所 ←

目的

一つか二つ、キーをたたいただけなのに、単語が三つも出ている。

「すうごーい。文字がどんどん出てきた」

昴も感激したように目を丸くした。

一健は音を出さないように、舌うちをした。悔し紛れに、

「定型っていうんだつけ？ それがあるんだよ」

心もとないパソコンの知識で応戦すると、知樹は、

「フォーマントね」

と、わざわざ言葉を訂正した。

「なに、それ」

「決まった事務的な文章。パソコンの中に、よく使う文書の形があらかじめ入っているから、それを呼び出しただけだよ」

「へえ、すうごい。さすがだね」

へん。

「そんなことより、計画だ」

一健は話を戻して、目的のあとに追加する項目を提案した。

「メンバーも書いてくれ。まずおれだ。千葉一健」

知樹は文字を打ちこんだ。

千葉一健

パソコン画面にいちばんに自分の名前が現れて、一健の気持ちは少し治まった。背筋をぴ

んと伸ばす。

「それから、良志な。高田良志、松島知樹、稻富昴」

「やつたあ」

自分の名前が呼ばれると、昴は万歳^{ばんざい}をした。

知樹は、壁にはつてあるネームプレートを確かめながら、四人の名前を流畅^{りゅうしょう}に入れた。
「それから、篠田早弓」

良志が言った。言いながら、ちらつと一健のほうを見たので、また顔が赤くならないかあせつたが、赤くなつたのは昴だつた。

「え、女子も？ ジやあさ、里央ちゃんも？」

「うーん。小さい女の子はどうかな」

「ええーっ。里央ちゃんもさそおうよ」

「いいんじやない、一健。女子が一人じや早弓もなんだろうから、みんなメンバーに入れと」

「そうだな。じやあ、佐原日彩と吉住里央」

漢字は、一健がノートに書いてみせ、知樹は名前を追加した。

「で、いつやる？」

メンバーが決まつただけでも力がわいて、一健は上半身を乗り出した。

「早く行こうよ、今日はどう？」

昴はさらに前のめりだ。

「それは無理だよ。えーっと。今日が十月七日、水曜日だから……」

一健は、壁のカレンダーを指さしながら言った。それぞれのベッドの脇には、カレンダーがはられていて、診察^{しんさつ}や検査の予定が書きこまれている。

「土曜日がいいよ」

と、良志。

「土曜日は、外泊^{がいはく}の子が多いから、そもそも病院内に子どもが少ない。ということは大人も

少ない。それだけでも見つかる危険性は低い」

さすがは良志だ。

「土曜日、じやあ十日だね」

昴が鼻息を荒くした。

「それも早いよ。まだ女子にも言つてない」

「てことは、十七日？」

「うーん。次の道徳はいつだっけ？」

「まだ決まってないよ」

良志の質問に答えながら、一健はそもそもの目的を思い出した。さすがは良志だ。

「じやあ、三十一日だ。十月三十一日」

「ずいぶん先だな」

勢いを止められたようで、一健は少し不満だった。そのうえ、知樹が知つたふうな」と言つた。

「こういうことは、しつかり計画を練つたほうがいいんだよ。道徳はその後にしてもうように頼もう」

「ちえっ」

今度は音を出して舌うちをすると、良志が言つた。

「十月三十一日は、満月なんだよ。しかもブルームーンという特別な月だ。青い月つていう意味」

「ええっ。月が青いの？ 見たーい。ぼく、星も月も大好き」

自分と同じ名前を持つ星があるせいか、昴^{すばる}は喜んだ。

「ラッキー・ニングジンも星形だもんな」

一健が言うと、良志は二つの意外な共通点を教えてくれた。

「ブルームーンは月が青いってわけじゃないけど、見れば願いがかなうって言われている。

ラッキー・ニングジンと同じだな」

「やつたー。絶対見るぞー」

昴が飛び跳ねた。

カタカタカタ。

盛り上がる三人を尻目に、知樹は淡々とキーの音をならして、日時の欄を埋めた。

日時 十月三十一日(土)

「何時？」

「それはもちろん夜だろう」

一健は自信を持つて答えた。月といえば夜だ。

「夜中にこっそり抜け出そう」

⑥ 口に出しただけでわくわくしたが、水を浴びせかけるような冷ややかな声がした。

「それはどうかな」

知樹だった。

「夜中に大勢でぞろぞろ動いたら危ないんじゃないかな」

「ふんっ、ちつ」

一健は大きく鼻をならした。舌うちもおまけだ。口と鼻で反発したら、がまんしていた言

葉が出てきた。

「知つたような」と言うなよ」

新入りのくせに。

続けたい言葉は、なんとか抑える。

「知つたようなって、おれは知つてるんだよ。この病院、夜中もしょっちゅう廊下を歩く音がしてるぜ。看護師さんは、二時間置きくらいに部屋に入つてくるし。千葉くんは寝てるから知らないだけだよ」

ばかにされたようで、一健はいきり立つた。

「そういうお前は、消灯時間に起きてるんだな。どうせパソコンやつてるんだろう」「パソコンは開いてない。説明書を読んでるだけだ。読書灯は禁止されてないからな」

「夜は寝ろよ。だいたいお前はわがままなんだよ」

こうなつたら、もう止まらなかつた。

「みんなパソコンとか、がまんしてんだよ」

「持つてくればいいじやん。おれが、許可をとりつけてやつたから」

「そういうことじやない。少しはがまんしろつて話だ。それに自分の手柄^{てがね}にすんなつ」

「事実を言つてるだけだけど」

「調子にのんなよ」

一健は声を張り上げた。その声に、カーッと熱が体を駆け巡つたみたいになつた。

「だいたい体も悪くないくせに、入院してんじやねえよ。学校へ行けよつ

熱に任せんみたいに口から飛び出したのは、思つてもみない言葉だった。

A あちやつ。
瞬時に後悔したが遅かつた。
おそ

知樹の目つきが、キツと変わつた。

「なんだとーっ！」

知樹がパソコンを持ったまま立ち上がつた。

「わっ、やめろ」

パソコンで殴^{なぐ}られるかもと、一健が反射的に頭をガードしたときだった。

「これこれこれ」

声とともに、誰かが近づいてきた。腕の隙間^{すきま}から見えたのは、なかよしさんだった。

「けんかはダメだぞー」

なかよしさんは、のんびりしたような声でそう言い、知樹をいすに座らせた。そして首か

ら下げたネームカードを一人の前にかざした。

「これに免めんじて、なかよくな」

「ダジヤレかよ」

一健は、やつとのことでそう言つた。

(まはら三桃『かがやき子ども病院 トレジャーハンター』)

オ 知樹しか知らない大人たちの見回り時間を、聞くことができなくなると思つたから。

問四
③ 「これで第一閥門は突破だ」とありますが、第一閥門とはどのようないちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

④ 「昂は目を輝かせてつばを飲みこんだ」とありますが、この時の昂の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア これから実行する計画に対し大きなかくごを決めている。
イ 乗り気でない気持ちをおさえ計画を受け入れている。

ウ 財宝を手に入れるということを聞いてわくわくしている。
エ これから行う秘密の行動に期待をふくらませている。

オ 秘密をもらさないように自分の中に飲みこんでいる。

ウ 財宝を手に入れるということを聞いてわくわくしている。
エ これから行う秘密の行動に期待をふくらませている。

問五
1 「胸が高鳴った」 2 「流暢に」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

1 「胸が高鳴った」

ア 期待や希望で興奮した

イ 突然のことにおどろいた

ウ 初めての経験に気分が高まつた

エ これまでにない喜びを感じた

オ 不安や心配におびえた

2 「流暢に」

ア とまどうことなく思い切りよく

イ まっすぐまじめに

エ 流れるように規則的に

オ すらすらとよどみなく

問二
① 「これから行うこと」とありますが、具体的にはどのようなことをするのですか。二十九二十字で答えなさい。

問三
② 「スペイを生まないためにも、」は何としても巻き込んでおかなければならない」とあります。なぜ知樹を巻き込む必要があつたのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 知樹が大切な計画書の作成を断ると、パソコンで作成する計画書ができなくて盛り上がらないと思つたから。

イ 知樹はもともと仲のよいメンバーではなかつたので、今回の計画を大人に言いつらしてしまつと考えていたから。

ウ 知樹が協力せずに自分たちと行動をともにしないと、大人に秘密をばらされてしまうと思つたから。

エ 知樹を入れておかないと、これまで計画したことを行つたことができなくなると感じたから。

問四
1 「胸が高鳴つた」 2 「流暢に」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

1 「胸が高鳴つた」

ア 期待や希望で興奮した

イ 突然のことにおどろいた

ウ 初めての経験に気分が高まつた

エ これまでにない喜びを感じた

オ 不安や心配におびえた

2 「流暢に」

ア とまどうことなく思い切りよく

イ まっすぐまじめに

エ 流れるように規則的に

オ すらすらとよどみなく

問五
① 「これから行うこと」とあります。具体的にはどのようなことをするのですか。二十九二十字で答えなさい。

問六
⑤ 「一健は音を出さないように、舌うちをした」とありますが、この時の一健の気持ちを説明した次の文の□にあてはまる語句を、本文中から五文字以内で抜き出して答えなさい。

一健は知樹との関係をこわさないよう□した。

問七
⑥ 「水を浴びせかけるような冷やかな声がした」とありますが、その声は一健にはどのように聞こえたのですか。この表現を説明した文として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 話している相手の考えをばかにしたような声。

イ 盛り上がつていて気持ちを否定するような声。

ウ 熱くなつた気持ちをなだめるような声。

エ 自分の気持ちだけを冷たく伝えるような声。

オ 自分の情報を仲間に見せびらかすような声。

問八
A 「瞬時に後悔したが遅かつた」とありますが、一健はどのようなことを後悔したのですか。五十く六十字で答えなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

現代は「失敗に厳しくする時代」と言えるでしょう。

ひと昔前は「失敗しちゃったけど、自分のまわりの一部のひとにしか気づかれていないし、そのうちすっかり忘れられるだろう」などと気楽に考えていました。

A しかし、いまは違います。

「過去の不適切な発言」という失敗によって、世間から大バッシングを受け、急きょ、二〇一一年夏のオリンピック・パラリンピックの開会式の総合演出の座から外されたアーティストや芸人がいたことは記憶に新しいと思います。

失敗に対して、世間があまりにも厳しいという事実は、有名人に限られたことではあります。

たとえ一般人であっても、軽い気持ちでSNSにのせた写真や発言が、名前も顔もわからぬ匿名の大勢のひとたちからの批判や誹謗中傷の対象となってしまい、人格否定にまで至る大失敗となってしまうばかりか、「デジタル・タトゥー（ネット上から消せない傷跡）」となつて、延々と苦しめられるケースも珍しくありません。

タレントや著名人ではなくても、私たちの誰もが「もし失敗したら、見知らぬ大勢のひとたちからネット上で袋叩きにあうかもしれない」と怯えて「さなければならない時代」に生きてています。

そんな息苦しい今だからこそ、私が提案し、研究を続けてきた「失敗学」の必要性が増しているのです。

ただ、^②よく誤解されることがあるので、い」であえて言っておきます。

失敗学は「失敗しないための学問」ではありません。

失敗学は「創造的クリエイティブ」に生きるための哲学です。

たしかに、失敗学を学んだひとは、学ばないひとよりも、失敗する可能性を低くすることができるでしょう。

「だったら、やっぱり失敗学は失敗しないですむために必要な学問なんじゃない?」と思うかもしれません。

残念ながら、^③その考え方は間違いだと言わざるを得ません。理由は二つあります。

一つは、日頃からどんなに用心深く行動しても、あるいは、どれほど失敗学を身につけたとしても、それでも「失敗」というものは必ず起ころうからです。

あなたのまわりのひとたちのなかに「絶対に失敗しないひと」はいるでしょうか。どんなに完璧なひとに見ても、生まれてからこれまでの人生のなかで「私は一度も失敗したことがない」と断言できるひとはいないと思います。

十数年前まで、原子力発電に関わる機関の発表資料等では「原子力発電は絶対に安全な発電技術」とされていました。言い換れば「原子力発電事業は絶対に失敗しない」と信じられていたのです。

しかし、二〇一一年三月に起こった東日本大震災で、私たち日本人を含めた世界中のひとびとが悲惨な原発事故という「取り返しのつかない失敗」を目の当たりにして以降、そんな「安全神話」は完全に消え失しました。

どんなに注意しても、どれほどたくさん知識を蓄えても、失敗を完全に防ぐことはできない——つまり、失敗学の目標は「絶対に失敗しない」とではないのです。

もう一つの理由は、もし「失敗学を身につけて、とにかく失敗しないように」とばかり考えて、失敗に怯えながら過ごしていたら、成功する機会も、成長するチャンスも失ってしまいます。人生がとてもつまらないものになってしまふからです。

失敗は必ず起こってしまうのですから、「絶対に失敗しないように」などというムダな考え方には捨てて、つい失敗してしまつたら、気持ちを切り替えて「絶好のチャンス!」と考え、「なぜ失敗したのか」「この失敗からどんな」とが学べるのか」を徹底的に分析・整理して、その後の自分の人生の糧にする知識やノウハウをきちんと身につけることが大切なのです。

その「分析・整理」や「糧にする」との具体的な方法を学んで身につけるのが「失敗学」の目標です。

つまり、取り返しのつかないような大失敗ではなく、後からリカバーできるような失敗であれば、恐れることなく、「チャンスだと思つたら果敢にチャレンジできる自分」になるための哲学なのです。

ここまで説明してきた二つの理由から、^⑤「失敗学は失敗しないための学問ではない」となるわけです。

では、「失敗学を学ぶ」とによって得られるメリットとはなんでしょうか。

まずは「自分の経験した失敗から正しく学ぶ方法を身につけることで、取り返しのつかないような大失敗の起ころ可能性を下げられる」ということです。

しかし、その先には、もっと大きなメリットがあります。

大きな失敗が起きる可能性を下げて、小さな失敗を必要以上に恐れないですむようになれば、本当は「成功するかどうかわからないけれど、こんなことをやってみたい」と思つて

いたことにチャレンジできる自信が持てるようになります。

しかも、失敗学で会得した「自分の経験した失敗から正しく学ぶ方法」を発展させると、「思いついたアイデアを実現する方法」にも応用できます。すなわち「失敗学を身につければクリエイティブな生き方ができるようになる」のです。

それは「創造学」とでも呼ぶべき新たな哲学と言えます。

(畠村洋太郎『やらかした時にどうするか』)

* バッティング・誹謗中傷……他人の悪口を言いふらし傷つけること。

* 匿名……自分の名前をかくして知らせないこと。

* 糧……人生を豊かにするもの。

* ノウハウ……ものごとの知識やコツ。

* リカバー……回復すること。取り戻すこと。

* 果敢に……思い切って行うさま。

問一 ① 「怯えてすぐさなければならない時代」とあります。それはどのような時代ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 小さな失敗さえ許されず、いつも緊張していなければならない時代。

イ 一般人はタレントや有名人とは違うことを認識しなければならない時代。

ウ 失敗しても、そのうち忘れられるだろうと気楽に考えられる時代。

エ タレントや有名人だけが批判や誹謗中傷の対象となってしまう時代。

オ 大勢のひとたちから批判されないように気をつけなければならない時代。

問二 ② 「よく誤解されることがある」とあります。どのように誤解されるのでしょうか。三十〜四十字で答えなさい。

問三 ③ 「その考え方は間違いだと言わざるを得ません」とありますが、考え方が間違いのはなぜですか。その理由として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 失敗しないで済む方法があるならば、失敗学を学んだ方が得になるから。

イ 失敗しないことばかり考えると、人生がつまらないものになってしまふから。

ウ 絶対に失敗しないひとになれるのは、努力してもわずかな数しかいないから。

エ 完璧な人に見えて、人生で一度も失敗したことがない人はいないから。

オ 日本には、失敗しても大きな問題にならない「安全神話」が存在するから。力 失敗してしまうと、それまでの努力もすべてむだになってしまふから。

問四

④ 「ムダな考え方」とありますが、どうしてムダな考え方だと言えるのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 失敗してしまうと、人生がとてもつまらないものになってしまふから。

イ 絶対に失敗しないような優れた人は、わずかな数しかいないから。

ウ 絶対に失敗しないように思っていても、失敗は必ず起きるものだから。

オ リカバーできる失敗であれば、それは失敗とは言えないから。

問五 ⑤ 「失敗学は失敗しないための学問ではない」とありますが、失敗学の目的とはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 失敗を自分の人生の糧にする知識やノウハウを見つけること。

イ わざと小さな失敗をすることで大きな失敗を避けること。

ウ 小さな失敗を気にしない強い心を身に付けること。

エ どんな小さな失敗もしない知識やノウハウを身に付けること。

オ 大きな失敗から立ち直るためにノウハウを身に付けること。

問六 ⑥ 「失敗学を学ぶことによって得られるメリット」とありますが、そのメリットとはどのようなことですか。適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 失敗を見つけることで、自分が思いついたアイデアを実現できるクリエイティブな生き方ができるようになること。

イ 大きな失敗を恐れることで、何事にも慎重に行動するようになり、危険なチャレンジをしないようになること。

ウ 大きな失敗を恐れず、何事にもチャレンジしていくとする向上心を持つことができるようになること。

エ 大きな失敗をかくし小さな失敗にみせかけることで、自分を守るノウハウを身に付けることができるようになること。

オ 大きな失敗が起きる可能性を下げることで、自分がやつてみたい」とにチャレンジする自信が持てるようになること。

カ 大きな失敗も実は小さな小さな失敗の積み重ねにすぎないことを理解する」とで、失敗を恐れなくなること。

キ A 「しかし、いまは違います」とありますが、なぜ昔と今は違うのですか。

その理由を「今は～が、昔は～」という形にして五十〜六十字で答えなさい。

問七

次の①～⑩の――の漢字はひらがなに、カタカナは漢字になおしなさい。

- ① 命を育む仕事。
② 果たして本当だろうか。
③ 村を挙げて取り組む。
④ 大河にすむ魚。
⑤ 暗幕で光をさえぎる。
⑥ 今年の冬は、去年よりアタタかい。
⑦ 初日の出をオガむ。
⑧ シヤオンの気持ちをあらわす。
⑨ だまつてセキゾウのように立つ。
⑩ 機械の操作にジユクタツする。

— 国語 — 第1回 一般選抜 〈解答用紙〉

受験番号		氏名		得点	
------	--	----	--	----	--